

02 映画「かづゑ的」からのメッセージ（ハンセン病）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、徳永玲子がお届けします。今日のタイトルは「映画『かづゑ的』からのメッセージ」です。

ハンセン病を経験した宮崎かづゑさんの人生に、8年間寄り添い撮影した映画「かづゑ的」が、2024年3月に公開されました。

10歳で家族と離れ、瀬戸内海にある国立ハンセン病療養所に入所したかづゑさん。面会に来る人も少ない中、家族は心配して何度も会いにきました。22歳で同じ患者の孝行さんと結婚。家族や夫からの深い愛と、膨大な読書で得た知識を心の支えに、この島で80年以上生活しています。病気の影響で、手の指や足の一部を失い、視力も弱くなっていますが、かづゑさんはやりたいことを諦めません。78歳でパソコンを覚え、84歳で自伝を出版。96歳になった今は、絵筆を包帯で手にくくりつけて水彩画を描いています。撮影した熊谷博子監督は言います。

【熊谷監督役】療養所の中で、かづゑさんは元患者としてではなく、一人の人間として前向きに暮らしています。この姿を記録するべきだと思いました。

25 (ナレーター) ハンセン病は、らい菌が原因の感染症です。非常にうつりにくく、薬で治る病気ですが、治療法が確立されてもなお、長期間にわたり厳しい隔離政策がとられました。そのため誤った情報が広がり、回復者とその家族は、長く差別で苦しめられています。

30 【熊谷監督役】ハンセン病だと哀れむ目を、かづゑさんは嫌います。療養所にはよく慰問団体が訪れ、行事の最後には「ふるさと」の歌を大合唱していたのですが、かづゑさんは嫌な気持ちになつたそうです。「故郷を追われた人の心がわかっていない。無礼だと思う」と。私たちは、どこまで相手のことを考えた行動ができていますでしょうか。

35 この映画を見たある学生は「かづゑさんをかわいそうだと思つていた自分が恥ずかしい」と言いました。病気や障がいがあると何もできないと決めつけていたことに気づいたのでしよう。

40 (ナレーター) 強く生きるかづゑさんの口癖は、「できるんよ、やろうと思えば。」その言葉に、熊谷監督も勇気づけられたと言います。

45 自分らしさを失わず誇りを持って生きるかづゑさん。その生き方に学ぶことで、私たちはハンセン病への偏見をなくし

ていくことができるのではないのでしょうか。

(本文 937 字)